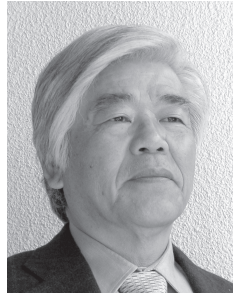


## 学習と教育の一丁目一番地



伊藤 洋

(山梨県立大学長)

二〇〇九年六月七日、バン・クライバーン国際ピアノコンクールにおいて、新進ピアニスト辻井伸行氏(二〇歳)が、一九歳の中国人女流ピアニストのチャン・ハオチェン氏と共に優勝しました。このコンクールは、過去にラドー・ルプーやアレクサンダー・コプリンなど、日本人には殊のほか人気のマエストロ達を輩出した名誉ある大会です。辻井伸行氏は日本人として初の優勝者となりました。

このコンクールの名を冠したピアニストのバン・クライバーンは、一九五八年の第一回チャイコフスキー国際音楽コンクールの優勝者ですが、彼は米国人にとつて単なる同胞であるよりも、米国民の自信を回復し、癒してくれた「英雄」でありました。

一九五七年一〇月四日、ソビエト連邦は人工衛星の打ち上げに成功し、「スプートニク一号」と名づけました。この頃、米国は巨額の開発費をロケット研究に注ぎ込んでいたにもかかわらず、人工衛星の打ち上げにはことごとく失敗していました。激しくなる一方の東西冷戦、その最中であつて五年前にはソ連が水爆実験に成功していました。しかし、その核技術はスパイ活動によつて米国の技術が盗まれたためであつて、科学技術におけ

る米国の優位は揺るがないだろうという、米国人のひそかな「安心」がありました。しかし、この人工衛星打ち上げ成功を見て、「安心」は木っ端微塵に砕かれてしまいました。ソ連が人工衛星技術で先行したということは、もはや米国の技術のコピーでないことを雄弁に物語っていたからです。

それでも、失地挽回に尽くした死力が奏功して、米国は翌一九五八年一月三十一日「エクスプローラー一号」と名づけた衛星を軌道に乗せることに成功しました。しかし、スプートニク一号の重量が八四kgに対してエクスプローラー一号は一三・七kgの軽量、技術的な劣勢は誰の目にも明らかでした。この「事件」は、後に米国の初等中等教育の在り方論議にまで発展する、深刻な論争を惹起しました。

こういふ米国にとつての国家的アイデンティティ喪失を尻目に、勝者の自信に満ちあふれた？ソビエト連邦は、自国の大作作曲家ビョートル・イリイチ・チャイコフスキーの名を冠した「チャイコフスキー国際音楽コンクール」を創始し、世界中の若手演奏家の登竜門を創設しました。当時、ソ連にはキラ星のごとく若手演奏家がいましたから、ソビエト政府は彼らが優勝をさらってくれるだろうと思つたに違いありません。ところが凶らんや、米国ルイジアナ出身の無名の青年バン・クライバーンが優勝をさらってしまったのです。米国人々が狂喜乱舞したことは言うまでもありません。帰国したクライバーンは全米各地で紙吹雪の中に出迎えられました。受賞後最初に録音したLPレコード、チャイコフスキーの「ピアノ協奏曲第一番」は世界のレコード出版史に残る三〇〇万枚を売り上げました。

いま、日本も一九五〇年代末の米国同様、明らかに国民的・国家的自信喪失の時代を迎えているように思われます。それだけに、この度の辻井伸行氏の優勝は、クライバーンと米国民同様、私たち日本人にとつても、まだまだやれるという国民的自信を与えてくれるものとなりました。

その辻井氏のインタビュー記事が「文部科学時報」N〇・一六〇五、二〇〇九年一〇月号に掲載されています。大変興味深い内容なので、同誌から少しだけ引用させてもらいます。

四歳から、いわば「英才教育」としてピアノのレッスンはじめたということについて自身としてどう思っているかという質問に、彼はこう答えています。「四歳から本格的に始めたといつても、バイエルですとか、

練習曲は一切やらずに、自分の好きな曲を、楽しく弾きながら勉強していくという感じでやっていました。本  
当にピアノが好きで好きでしょうがなかった、という感じでしたので、伸び伸びやっていったのかな、と思  
いますね。

ここには巧まずして教育の原点が語られているように思います。また、現代の私たち大人の教育への関与の  
仕方が痛烈に批判されているようにも感じられます。明治の音楽取調掛以来の伝統的な音楽教材を使わなかつ  
たのは言うに及ばず、学ぶという行為について、「好きで好きでしょうがない」という喜びを、学生・生徒・  
児童・幼児に与えてきたのか否か、教育にたずさわる全ての人々が検討し直さなければならぬ重要な課題を  
指摘しているように思われます。

そもそも、辻井伸行氏の才能の発見は彼の母親に依っているとのことです。これについても同誌上で、一歳  
の頃、ブーニンの弾くシヨパンの「英雄ポロネーズ」のCDを母親がよくかけてくれ、それを聴いているとき  
には、赤ん坊は足をバタバタさせ、ご機嫌でいてくれるので、母親はいきおいそのCDばかりをかけていたと  
ころ、とうとうこれが擦り切れて、最後には再生できなくなってしまう。そこで、両親はまた新たに同名の  
CDを買ってきて赤ん坊に聴かせたが、今度は反応しない。お母さんは、新たに買って来たCDが、ブーニン  
盤ではなく別人のものであったからだとすぐに思い至った。これが辻井氏の才能を両親が発見した瞬  
間だったということです。

「それで、母は、この子には、演奏家を聞き分ける力があるのではないか、と思い、私におもちゃのピアノを  
買ってくれました。(中略) ちょうど二歳三か月くらいのクリスマス頃の、ある日、母がジングルベルを歌っ  
ていたところ、隣の部屋から、それに合せて弾く音が聞こえてきたとのことなのです。(中略) それを見た母は、  
この子には才能があるのでは、と思ったようです。それがきっかけで、四歳からピアノを習い始めることにな  
りました。」と回顧しています。ここにも一人の人間の「才能の発見」という、教育にとつての一丁目一番地  
が位置づけられることの重要性が語られています。いま、私たち教育関係者が、若者の才能の開花について、  
こういう至近距離から気づき、かつ促して来たか、という観点が問われています。

ピアノスト辻井伸行氏は全盲です。そのことについても彼はこう語っています。「目が見えないからといって、苦勞したことはありません。ただ、どうしてもできないことなどはありますが、そういうことは関係なく、僕にとつては、やはり、ピアノがあるから、ピアノが弾けるから別に関係ないことである、と思つています。(中略) もし、目が見えていたら、ピアノをやっていたのではないかな、と思つこともありまして、見えないからこそ、僕にとつては、ピアノがあり、今、この人生があるのだな、と思ひます。」さすがにバン・クライバーンをして「奇跡としか言いようがない。神業だ!」と言わしめた報道されているだけのことはあります。

いま、大学生の問題点として、辻井氏が言う「どうしてもできないことがあるが、そういったことは関係なく、○○があるから、今、この人生があるのだな」の「○○」を獲得することに失敗し続けている「若者群像」に集約することができます。ユニバーサル化の時代を迎えて、「○○」を持たずに入学し、「○○」を獲得できないまま卒業し、卒業後も就職しないか、しても三年以内に離職する、あるいはまた「生きること」にすら逡巡している若者が少なからず存在しています。

辻井伸行氏の上記記事に触れて、国学者・塙保己一に学んだ江戸番町の「目明き」達の気分を思い知らされた人は多かったのではないのでしょうか。今こそ、バン・クライバーンの故事にふれ、辻井伸行氏の優勝を機に、「教育」を原点に近いところから再検討する時なのだと思います。